
魔王のこうせき（改訂版）

秋月 実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王のこうせき（改訂版）

【Nコード】

N9147W

【作者名】

秋月 実

【あらすじ】

アルカディアの魔王のこうせきの改訂版です。

英雄バークトの犠牲により、魔王は倒れた。しかし、その子が異世界へと逃亡してしまった！ 愛しいバークトの為に、絶対に魔王を逃すわけにはいかない。

だから、エリアは異世界へと転生の術を使った。

銃とミサイル、戦闘機の科学の発達した世界へと。

魔法世界と科学世界の接触。政府とエリアは現代に逃げ出した魔王を倒せるのか。

プロローグ

誇張でなく、山のような、もしくは天を支える柱であるような大きな樹木。それは第一神殿と呼ばれ、魔法で大きく開けられた洞では多くの人々が慌ただしく動いていた。

第一神殿の前の広場には死者、死者、死者。多くの死者が並べられていた。

彼等は、幸運な方だろう。何故なら死体があり、司祭様方の浄化呪文を受ける事ができるのだから。

あちこちで、死者に縋って女子供が泣き、男は別れを惜しむ権利すら与えられず死体を運ぶ作業していた。

別れを惜しむ声。今は亡き戦友に勝利を伝える言葉。すすり泣きと叫び。第一神殿はさやさやと葉を揺らし、風で死臭を吹き散らして人々を慰めていた。

——頑張ったね、子供達。これからどんな困難が待ちうけようと、今日だけは泣いてもいいのだよ。

そういったお告げが相次いだ。司祭様方が、死者に縋る人々にそのお告げを伝え、背を撫で、肩を叩き、頭を撫でる。

……今日だけは泣いていい。今日、だけは。明日からはまた、復興に向けて戦っていかねばならない。

突如異世界から現れた魔王は、瞬く間にこの世界を蹂躪していた。

男は殺され、女は魔物を孕まされ続けた。

長年の戦いにより、ようやく魔王を倒せたのが昨日。神々に急がされ、魔物の追撃と浚われた女たちの救出作業をしている時、魔王城が動き出してこの世界から消えたのがつい先ほど。

戦いが終わり、ようやく私は愛する人の所に来る事を許された。

私は死者の一人、七英雄のパークトの頭をずっと撫でていた。

パークトは人間でありながら異常な魔力を持った剣士だった。ダークエルフの七英雄である私と同じ魔力量と言えば、その凄まじさがわかるというものだろう。その癖っ毛の、黄金に輝く金髪は、今は泥で薄汚れていた。髪だけでない。エルフほどではないが整った顔も、司教様がパークトの力を最大限発揮できるよう詠えた、魔力を秘めた宝石を所々につけた煌びやかな鎧も、見る影もなくぼろぼろで、泥と血に汚れていた。

それでも、パークトはまるで眠ってでもいるかのような、安らかな死に顔だった。

パークトは自らの生命力の全てを剣に注ぎ込んで魔王に切り込んだ。

その一撃はパークトの命と引き換えに魔王を倒した。

『生きて帰ったら、結婚しようぜ。普通の女の子、させてやるよ』

死ねと言われているに等しいその役目を任されてなお、へらりと笑ったパークトの顔が頭に焼き付いて離れない。

パークトに抱きついて、泣きじゃくって、パークトは驚いた顔をした後、優しく抱き返してくれて……。

パークト、私を抱きしめてよ。あの時と同じように。

私は途方もなく疲れていた。魔王との決戦、残された魔物の追撃。救出作業、パークトの死。そして、私の右肩から左のわき腹へと続く切り傷。

向こうの世界で、結婚しようね。パークト。

だんだんと意識が薄れていく。

——立ちなさい、七英雄。エリア・サーキュリィ。貴方には、果たさねばならぬ役目があるのです。

眠る私に、精霊が囁いた。

「起きなさい、エリア」

慈愛の込められた深いテノールの言葉に、私は目を覚ます。

エルフ族の中でもずば抜けた、美の女神オリビアさえも愛でられているお美しい大司教様が、慈悲深き瞳で私を見つめていた。

一点の穢れすら許されぬはずの大司教様の白くゆったりとした神官服が、血と泥で汚れていた。

「だ、大司教様！ どうしてここへ……ぐっ……」

傷が痛む。しかし、以前ほどではない。回復呪文をかけてもらったのだ。

大司教様直々に！

血と泥は、その際についた汚れなのだろう。

「貴女とパークトに用があつたのです。最後の別れは済ませましたか？」

「は、はい……」

大司教様は、パークトの頬を撫でると、悲しげに微笑んだ。

「パークト、よくやりました。貴方がこの平和をもたらした……」

そして、大司教様は浄化の呪文を唱える。

大司教様直々のお言葉と呪文に、私は涙を流した。

パークトの体は土くれとなり、後には服と武器とが残された。

私はそれを大切に回収し、水晶に入れた。

この土は森にまかれる。パークトの体から出来た土を与えられた木はさぞ元気に育つだろう。そして、パークトの命は受け継がれていくのだ。

「ついてきなさい、エリア」

「はい」

私は大司教様に続き、立ち上がって第一神殿に入った。

大人が十人手を伸ばしたほどの洞に入り、地下へと下っていく。

「エリア、魔王の子が逃げ出したのは知っていますね」

「はい……可能な限り急いだのですが……。申し訳ありません、大司教様」

「悲劇を繰り返すわけにはいきません。あれは我等が滅ぼすべきものの」

「はい」

地下の祈祷室に入ると、そこでは既に司祭様達が私を待っていた。私が倒した四天王力チスの魔物の鉱石が宙に浮かび、黒く輝いている。

魔物は例外なく、倒すと鉱石となるのだ。そしてそれは凄まじく良質の魔力媒体になる。

「未来視の神ポータス様より、次の魔王の出現地と時期がわかりました。あれは、また異世界で殺戮を繰り返す予定のようです。しか

し、今なら魔王に先回りし、向こうに人を送ることが出来る。出現時期は十七年後。その種族の子として生まれれば交渉も上手くいくでしょう」

大司教様の言葉に、私は頷いた。

「異世界への転生の術ですね」

大司教様は、厳しい瞳で私を見つめた。

「エリア。魔王の子を異界に逃がしたのは我らの失態。その失態の責を異世界の住民に被せる訳には行きません。七英雄の名にかけて必ず倒して来るのです。武器は後から送りましょう。厳しい戦いになるでしょうが……行ってくださいね」

否応はなかった。神の命であり、大司教様の命であり、魔王の子を逃がした私の責任であり、魔王の一族はパークトの仇だからだ。

「わかりました、大司教様……」

私は大司教様の服の裾にキスをし、身につけている全ての服を脱ぎ去った。

そして、魔法陣に横たわる。

司祭様達の声が唱和され、魔物の鉱石がまばゆく光り、私の体は光へと打ち砕かれ……。

「おんぎゃああああ!!」

私は、異界の赤子として生れ落ちた。

1話

こじんまりとした、質素な部屋。

小さな本棚、学習机とその上のパソコン、筆筒、そして布団。それが部屋にある全て。

私はいつも通りにパソコンを操作し、防衛省にメールを書いてインターキーを押した。

「中々引つかかって来ないなあ……」

十歳になった私は頭を抑えて呟いた。光となって転生する事で、魔王に先回りする事は出来た。しかし、ここに生えている木は凄く少ないから、気の休まる暇すらない。そのうえ、この世界は酷く歪な発展を遂げていた。何故か魔法の類が皆無で、その代わり科学とか言う妙なものが発展しているのだ。空を飛ぶことすらできないと言っただから、恐れ入る。

科学はなるほど、素晴らしい力を秘めている。例えば、先ほど空を飛ぶことさえできないと言ったが、その代り飛行機と言う物を持っている。そんな大人数を運ぶ事など、司祭様が複数集まらないと無理な事だ。

宇宙に行く事など、大司教様すら出来ないだろう。

そしてその半面、酷く大地を汚す。よくもまともに生活できと思うほどの空気の汚さだ。

文化の違いは受け入れがたいけれど、私の任務は魔王を倒す事。その為には、現地の人の協力が必須だ。

その為にまず、魔王の存在を信じてもらう事が必要となる。

しかし、子供の言などたやすく信じては貰えないだろう。

この世界では魔術がないようだし、魔術を示して見せるのが一番いいかもしれないと私は考えた。

ただし、この地には魔女狩りという伝説があった。安全を確認できるまで、正体をたやすく知られるわけにもいかない。

ここは予言という形が一番いいだろう。幸い、ノストラダムスという大預言者もいるし、この世界は自然災害が多い。自然災害の予知ならエルフの得意分野だ。森の加護は、生まれ変わってなお私の上にある。

私はまず、所在を知られずに書きこみする方法を学んだ。

そして、予知をしては某巨大掲示板に書きこみ、防衛省にメールをしていた。

「あら、またパソコンをしているの？ 会心ちゃん。たまにはお母さんと一緒に遊びに行きましょうよ」

茶髪の、どこか幼い感じのする可愛い女の人。それが私の母だった。

事実、母は若い。十七で私を生み、今はまだ二十七歳だ。父親はいない。

私の為に必死で働いてくれる母を、守りたかった。この世界は既に私の第二の故郷でもある。

「そうね。緑を見ないと息が詰まっちゃうわ。また一緒に登山に行きましょう？」

私が強請ると、私に甘い母はクスクスと笑って言った。

「お姫様の仰せの通りに」

その週の休日は、登山に出かけることになった。

「わあ、私会心ちゃんのお弁当楽しみだなあ。私はお菓子を用意す

るね。会心ちゃんは飴好き？」

母は料理が苦手だ。母に食事を任せると、お菓子を皿に並べてくる。

赤ちゃんの時はそれはそれは苦勞したものだ。

体が自由に動くようになってまずしたのは料理を覚える事である。それでも、母が私を一生懸命愛してくれているのはわかった。

私は母が大好きだ。

母と自分の為に、サンドイッチとから揚げ、ポテト、兔のリンゴをバスケットにつめる。

水筒には良く冷えたお茶を入れて、準備は完了だ。

ハイヒールを履いていこうとする母を止め、お揃いのスポーツシューズを出して来て、二人で登山に出かける。

「会心ちゃん、もう休憩しましょうよう」

「頑張つて、お母さん。後少ししたら休憩しよ、ね？」

適当な所まで登って精霊がたくさん息づいている所まで行くと、私は寝転び、耳を研ぎ澄ます。とても気持ちいい。

「会心ちゃん、休憩？ そんな所で寝ていて気持ちいい？」

「うん、とっても。連れてきてくれてありがとう、お母さん」

歌うように呪文を唱え、周囲の木々と一体となる。

「いい歌ねえ」

お母さんもそこにシートをしいて座り、心地良さそうに目を閉じ

た。

次の予知……主に自然災害情報を精霊から聞き取って、立ち上がる。

「もういいわ。お母さん。帰りましょう?」

母に話しかけると、母は寝息を立てていた。仕事で忙しかったから、休日は寝てたかっただろうに。娘の我侭一つでこんなに疲れているのに山まで来てくれる母は、やっぱり好きだ。

私は、母の隣に寝転ぶと周囲の木々との対話を楽しみながら、一人でも戦う決意を固めていった。

魔王との戦いが、そろそろ始まる。私だけでも、戦う準備を始めていけない。

絶対に、バークトの死を無駄にはしない。

既に、荷物はついている。

家に帰ってお風呂に入り、夕食の支度をして人心地ついた私は再度メールを出した。新たな自然災害の予知と、魔王が来るという内容のメール。差出人はダークエルフのエリア。

某巨大掲示板にも、予知を載せる。これに関しては、段々と手ごたえを感じて来ていた。信じてくれる人は、着実に増えて来ている。最も、予知の最後を面白おかしく改変して広めてしまう人も多くて、困っているのだけだ。

掲示板に書き込みをした後、私は無力感を噛みしめながら就寝した。

翌日。私は届いた一通のメールに、歓喜の声をあげた。

日本国首相、津木野真男。彼の会いたいという言葉に、私は迷わず了承のメールを返した。

待ち合わせの場所は人気のない公園。

送信を選択して、クリックする指が震える。大丈夫、私はちゃんとやれる。

見ていて、バークト。

待ち合わせの日。私は呪文で生来の姿を取り戻し、向こうの服を着て一時間ほど前に公園に向かった。空を飛んで、である。

待つこと三十分。SPの人に囲まれて、テレビで見た日本国首相、津木野さんがやってくる。体格のがっしりした、首相たる威厳を持った壮年の男。

津木野さんは私を見て、目を丸くした。

風の精霊が、応援の意味を込めて風を吹かせる。私はそれに励まされ、微笑んだ。

「初めまして。日本国首相、津木野真男さん。私は、ダークエルフの七英雄、エリア・サーキュリィ。ずっとお会いしたかった」

私の戦いは、ここから始まる。

2話

「ダークエルフのエリア？　なんだね、それは」

首相に就任し、様々な引き継ぎをようやく終えて、大臣達とささやかな宴会を開いていた時だった。すっかり酔っぱらって顔を赤くした防衛省大臣の剣野守が、機嫌よさげに頷いた。

「ああ、有名な占い師だよ。自然災害を予告して、巨大掲示板と防衛省に送ってくるんだ。その予言はいつも、最後に魔王が来るから防備を固めるで終わるんだ。魔王なんて馬鹿らしいと思うが、自然災害については百パーセントの的中率だね。前政権は、予知を元に自然災害対策の予算を組んでるって噂だ。ま、引き継ぎの一環として覚えていてくれ」

魔王、ダークエルフ。私はこう見えて、ファンタジー小説が大好きだったのだ。政治の世界、冷たい現実。ファンタジー小説は、それに疲れた私に夢を与えてくれた。それに、百パーセントの予知なんて面白そうではないか。

「へえ、面白いな。実際に会ってみたのか？」

「いや、そんな……なにか怖いじゃないか」

そう苦笑して、剣野くんは酒をグイッと飲み干した。

「防衛省大臣がそんな事でいいのかい、剣野くん。よし、私がつて来よう。魔王がこういうものなのか、聞いてみようじゃないか。」

相手の連絡先は？」

「おい、本気か？ 一国の首相が、得体の知れない相手に会うなんぞ……」

「SPは連れていくさ」

そして、私は酒の勢いのままにメールをした。

剣野くんが若干慌ててメールの返信を持ってきたのはすぐだった。待ち合わせ場所は、人気のない公園。いいさ、行つてやろうじゃないか。

ダークエルフが本当にいるなら見てみたいものだ。

そして、私はパリッとしたスーツを着て、SPを引き連れ、三十分前に待ち合わせ場所へと向かった。舐められてはかなわないからね。そこには既に一人の女性が待っていた。黒いマントとフードを被っている、いかにも怪しげな風貌だ。何より、箒に乗って空を飛んでいる。

風が、吹く。とたん、脱げるフード。

風に流される美しい髪。褐色の肌。目の覚めるような美貌。しなやかに伸びた手足。微笑みは女神の如く。マントの下その服装は、信じられないほど大きな宝石を誂えた鎧。どれもが私の目を釘づけにしたが、一番心を突き刺したのは、尖り、横に折れるように伸びた耳だった。ダークエルフの、エリア。剣野は確かにそう言った。

「初めまして。日本国首相、津木野真男さん。私は、ダークエルフの七英雄、エリア・サーキュリィ。ずっとお会いしたかった」

「初めまして、エリアさん。津木野です」

政治家として訓練していなければ叫んでいただろう。しかし、私

は笑顔で答えて握手をしていた。

「早速ですが、魔王が来るまで、もはや時間はありません。かねてよりお願いしていた軍備の増強は、聞き届けて頂けるのでしょうか」

そうだ。予知率百パーセント。本物のダークエルフ。次に来るのは本物の魔王である。

「私は、魔王とは何なのか聞きに参りました。エリアさん、今こそ全てをお話し下さい」

エリアさんは、頷いて水晶に手をつ込み、中から大粒のダイヤを取り出した。

信じられない行為に興奮を覚えながら、表向きは平静を装ってダイヤを眺める。

「魔王に関しては、私も良く知らないのです。あれは、異世界から突如現れ、男を食らい、女を孕ませ、暴虐の限りを尽くし、討伐されるとその子を別の異世界……この世界へと送りこみました。私はそれを追ってきた」

ダイヤがぼうつと光って、突如醜悪な怪物とそれを迎撃する美しいダークエルフ達を映し出した。

SFのスクリーンのように、立体的な映像が飛び出してくる。

その迫力に私が目を奪われていると、エリアさんはダイヤを両手で包み、映像は消えた。

「これを、防衛省に。そして、軍備を整えて下さい。魔王は今、次元の狭間で力を蓄えています。そして、後六年ほどでこちらの世界にやってくるでしょう。私の命を掛ければ、魔王を倒す事は出来ま

す。けれど、残された魔物の掃討は貴方に頼まなくてはならない」

エリアさんが、黒曜石のような美しい瞳を潤ませて私の手を包む。その手は柔らかく、暖かった。

「わかりました。必ず、防衛省大臣に届けます。一週間後に、またメールをお送りします」

エリアさんは頷き、箒を水晶から取り出して飛んで去って行った。私は無言で電話を取り出す。

「ダークエルフのエリアの家を突き止める。誰にも悟られるな」

気分が高揚するのを抑えられない。美しい夢が。ファンタジーが。今、掴める現実となって舞い降りてきたのだから。

多少の細工はしていたようだが、その道のスペシャリストには叶わない。すぐに家はわかった。木田峰子三十三歳。木田会心十歳。母子家庭。その経歴から趣味に至るまで、すぐに調べ上げられる。時々山へ行くと言う口実で二人でどこかに出かけている。二人には監視をつけ、一週間で会心の正体がエリアだと突き止めた。

もちろん、その間に何度も話しあいの場を持っている。

そして、同じ頃、ようやく私は記憶媒体らしいダイヤの制御方法を習得し、剣野くんを呼ぶ。

「謎の占い師はどうだった？」

剣野くんの言葉に、私はダイヤを取り出し、にやりと笑って再生させる。

「魔王は、本当に来るそうだよ。剣野くん。ところで、魔王はミサイルで倒せると思うかい？」

剣野くんは、驚いた顔でダイヤから映し出される映像と私の顔を見比べる。そして、瞬時に頭を切り替えて、真剣な顔で私を見た。

「詳しい話を聞かせてもらおうか」

そして、会議は始まった。

再生されるのは、異世界軍と魔王の軍勢との決戦の場面だった。

ダークエルフが魔弓を放ち、エルフが癒しの呪文を唱え、人間が大規模魔術を発動させ、獣人と人間の戦士が突撃し、召喚獣が吠え、竜騎士が突撃する。

トリックと断じるには、あまりにもリアル。なにより、その映像はダイヤから映し出された。そんな技術、日本には、いや、世界には存在しない。

場面は推移する。魔王に囚われ、手足を潰されて犯されていた女達を助ける場面、一人の英雄が光り輝く剣を持って魔王を両断し、倒れ込む場面、そしてとてつもなく大きな木に集まる人々、木の洞の中で司祭らしき人物に傳く人々。

映像の再生が終わると、私はおもむろに言った。

「このまま公表しても、主導権を奪われるだけだ。私はそれを望まない。さあ、剣野君。悪だくみのお時間だ」

絶対に、この玩具を、この祭りを、他の者に台無しにさせるような事はしない。

3話

いつもと変わらない、ぶら下がり会見。口々に何かネタはないかと迫る記者達。首相は、何気なく口を開いた。

「そう言えば、ダークエルフのエリアという予言者をご存知ですか？ 知名度ではノストラダムスに劣りますが、日本を代表する予言者です」

「ダークエルフのエリア、ですか？ いえ、知りません」

それに、首相は意識して驚いた顔を作る。悪戯の始まりの予感に、笑いだしそうだった。

「なんと。知らないのですか。彼女の予知は、今現在百発百中です。そして、彼女がいつも最後に予言するのが、六年後に魔王が出現すると言っ予言なんですよ。魔王が現れるなら、勇者を用意しなくてはと剣野君と良く話すんです。魔王と真正面から立ち向かい、見事打ち破って世界を救う日本。各国も巻き込んで、盛大に盛り上がるつもりです。ぜひ、国民の皆さんにもご参加頂きたい。本当にエイリアンがやって来るかもしれませんね。NHKさんには、最大一か月ぶっ続けで勇者特番を放送してもらうつつもりです」

あくまでも、楽しそうに首相は言った。

「はあ……。それは、国家予算を使っんですか？」

当然、訝しげな表情の記者。それが、首相には面白くてしょうがない。

彼らはどんなに驚くだろう！

「百発百中の予言ですよ？ それに、エイリアン対策に予算を割いている国家はほかにもあります。その延長線上と思えばよろしい」

にこにこと笑う首相。その笑顔に裏を感じる事が出来た者は、一人もいなかった。

その後、国会で対魔王予算を獲得、魔王対策委員会を発足。勇者は自衛隊から選定する事も決まった。

それと同時に、会心親子は姿を消した。もちろん、それに注視する者はいなかった。

一月後。国連で、珍しく日本代表が手をあげる。

指名され、日本が立ち上がると同時に配られた資料を見て、会議場は僅かに苦笑と困惑に包まれた。

「えー、皆さん、我が国を代表する予言者、ダークエルフのエリアをご存知ですか？ 内容はまあ、ノストラダムスと同じです。六年後に魔王が現れる的な。これを機会に、皆さんと親睦を深められたらと思います。ほら、本当にエイリアンとかが攻めてくるかもしれないし。内容は、皆さんと協力して、日本が中心になって魔王を倒す、というものです。資料に書いてありますのは、皆さんに、本当に法案を制定して欲しいのです」

「日本が中心になって、ですか？ どうせなら、投票で決めたい
かです」

一人が手をあげる。

「そこはまあ、言い出しつぺの特権と言う奴で。ぜひ、御参加頂
ければ幸いです」

「魔物のお仕事の中に、人を襲う事と戦利品を落とす事とあります
が、魔物役と景品は各国が用意と言う事ですか？」

「ええ、もしも魔王が現れなかったら現れなかったで、用意しよう
と言う事です。更に、各国自慢の兵器を出して壮大な映画を取ろう
かと。六年ありますから、ギリギリ今からでも開発できますよ。設
定資料は送ります。当たり前ですが、核のような汚染著しい物は使
用禁止です」

「ほお。それはまた本格的な……」

日本が口を出すのは、非常にまれな事だ。それも、このような大
規模な催し物は初めてである。しかも、兵器にまで言及している。
各国は、乗り気になっていた。

「美味しい役は日本が独り占めか？」

アメリカ代表の揶揄するような言葉に、恭しく礼をする日本代表。

「もちろん、我が同盟国たるアメリカにも、大活躍してもらいます
とも。魔王との大戦争に、貴方がいなくてどうします。ただ、既に
六年間のスケジュールは出来ているので、ホストは日本が致します。

ちなみに、勇者様にはネタが無いように六年間連絡を絶つてもらいますが、それでもよろしければオーディションにご参加ください。ちなみに、日本ではこの日の為だけにスパイ防止法を施行する予定です。募集要項は資料に書いてあります」

「そこまでするか。気合が入っているな……。楽しみだ」

アメリカ代表も、期待に胸を膨らませて言った。

日本代表は、安堵の笑みを見せる。……誰も、魔物を倒した「戦利品」の所有権は全て日本に帰するという法律に気付かなかった。

それと共に、善意を利用している事に良心の痛みを感じた。

埋め合わせは、それこそ勇者として命を使う覚悟でないと誰も納得しないだろう。

魔物を倒せば、鉱石が手に入る。それは、魔力の塊。それは、新たな資源である。

日本は、資源大国に憧れを抱いていた。その為なら、どんな手を使ってもいいと思うほどに。

オーディションは、簡単な物だった。

書類審査と、魔法を使う演技である。ただし、軍人や警察官、もしくは科学者で、日本語が理解できる必要があった。

六年間の隔離と言う事で、期待と不安に胸を高鳴らせながら、乗ってきたバスから降りる。国から命じられて嫌々やってきた者も、役者となる事を楽しみにしてきた者もいるが、その顔は一樣に不安顔であつた。

昼ご飯を食べ、山奥に入る前に、盗聴器防止の為にあらゆる物の持ちこみを禁じるので、とりあえず全部脱げと言われたのだ。彼らは全裸だつた。何が日本をここまで駆り立てるのか。理解不能だつた。しかも、役者の数が半端ではなかつた。五百人はいるのである。もう帰りたい。そう思いながら彼らがバスに降りると、腰を覆う為の布を渡され、いかにもファンタジーな鎧を着た自衛官が一行に並んでいた。

その前に、彼らを率いるかのように、幼い少女が立っている。

「全員、整列！」

訳もわからず、並んだ。命令が体に染みついているのもあるし、声が毅然としているのもあつた。

「我が名は七英雄が一人、ダークエルフのエリア。弓姫エリアである。これから、貴様らには六年間みっちり魔王の軍勢を相手取る特訓をしてもらう！ 逃げだしたり、秘密を漏らせば厳罰に処す！ これは世界を混乱に陥れることなく、速やかに魔王を倒し、平常へと戻る為に必要な処置である！」 と言っても、理解が出来ないであろう。そこで、まずは模擬戦を見てもらい、資料映像で勉強をする。なお、ここには各種材料しかない。家から着る物から食べる物まで、全て魔法で用意してもらう。全てだ！」

意味不明の事を言われ、とりあえず体育座りで隅に並ばされる。森のと真ん中、全裸の兵士達が座る様はシュールだつた。

自衛官達が向かい合い、箒片手に礼をした後、素早く箒に乗つた。

飛んだ。

慌てて眼を擦る兵士達。ワイヤーは見えない。

「サキユサキユサキユ……ガーストール！」

片方が叫んで片手を差し出せば、どう見ても凶悪そうな光の弾が高速で飛んでいく。

それをずっと避ける対戦相手の自衛官。

流れ弾が飛んできて、慌てて兵士が避ける。

着弾して木に当たったそれは、柔らかな素肌に容赦なく木屑の雨を浴びせかける。

「ええええええええええ！？」

広がる動揺とざわめきを一喝したのは、少女だった。

「この後、実際にやってもらっぞ！　しっかり見て、聞き、魔力の流れを感じる！」

「本物の魔法使い？俺の時代キタあああああ！」

叫ぶオタクっぽい裸の日本人。その頬は赤く紅潮していた。

それに冷たい目を浴びせる兵士達。

とにかくにも、俄然真剣に試合を見始めた。

集中して避けないと、流れ弾に当たって死にかねない。

三試合ほどして、コスプレ自衛官達は肩で息をしながら引っ込んだ。

「準備期間二カ月ではこの程度か……。仕方あるまい。次、魔王の軍勢との戦いの様子の視聴だ。以前と違う点は、二つ。一つ目、今

回は、貴様らの誇る科学の守護がある。二つ目、魔法使いは貴様らだけだ。魔物は物理攻撃に強く、魔法攻撃に弱い。物理攻撃だが強力な兵器か、魔力攻撃だが新米の魔法使いか。協議の結果、思いつく全ての方法を試すと言う事となった。繰り返す、全ての方法を試すと言う事になった。もちろん、考えるのも試すのも貴様らの役目だ。負けは絶対に許されない。先人の戦いを、しっかりと観察するように」

そして、綺麗な石ころにしか見えない何かから、巨大な映像と音声が出てくる。

果てしなくリアルで、ファンタジーな映画としか思えないそれを声も無く見つめる、全裸の男達。

エリアはそれを一切気に掛けることなく、映像を逐一解説する。曰く、敗れば女は犯され、男は殺される事。それが世界中で起こると言う事。倒した魔物は鉱石となる事。これは武器になるので必ず持ちかえる事。確認された魔物の種類。使う技。

たっぷり一時間は視聴した後、十分間の休憩を貰った。

ついでに、休憩時間にビデオに記録を残すのは可と言う事だったので、そういった習慣のある者が記録を残す。他にも、公式に訓練の記録を残す掛かりの者がいる。ビデオとバス、巨大冷蔵庫だけが文明の利器だった。更に、資料ならいくらでも請求できる事を知らされる。

「マイクだ。とんでもない事になっちまった。素っ裸にされたと思ったら、魔王が本当に来る事を知らされて勇者にされた。俺は歴史に残る勇者になるに違いない」

「魔術ってビデオに映るのかな……」

休憩が終わると、全員好きな色の布を持たされ、一か所に集めら

れる。周囲をコスプレ自衛官に囲まれ、嫌な予感を感じない者は一人もいなかった。

「今から、貴様らの眠りこけた魔力を呼び起こす！ 魔力を感じて自由に引き出せるまで、何度でもやる！ 対ショック体勢！」

言葉と共に、迸る雷撃。

「ぎゃあああああああ！」

びりびりする体に思わずよろめくが、少女は容赦が無かった。

少女は、高々と布を掲げる。

「注目！ 体の魔力をへそに集め、へそから腕へ。腕から布へ。そして魔力が行きわたった瞬間にイメージ！」

布が発光する。生き物のようにみるみる動いて、服を形成した。もはや、驚くしかない。

「出来た物から離脱！ その原田教官から習って魔法を使って今日の夕飯を作れ！ 出来なかった者は雷撃を食らってから再チャレンジ！ 出来るまでだ！」

少女の手にした、ついさっきまで四角い布でしか無かったそれ、ワンピースと自分の手の内にある布を何度も眺める。

一人が、動いた。

「へそ！ 腕！ 布！ 唸れ俺の妄想力！ 出でよ格好良い服！」

布は、確かに揺らめいて……ゴスロリの服を作った。

それは、彼が嫁と豪語するとあるアニメキャラの服であった。

「着ろよ」

幼女の端的な命令に、がつくりくる男。

「さっきのは一見見事だが、無意識化に頼り過ぎる！ だから目的ではなく、自分の本心が出てしまうのだ。集中！ 集中！」

とにかく、不完全とはいえ、一発で成功させた者が出たのだ。

兵士達は、試み始めた。

確かに、雷撃を受けた後、体の中心で何かが熱くなる。それを捕まえて、布に持って行く作業が至難の技だった。更に、それから服のイメージがあるのである。

「む。そろそろ十回か。これ以上は無茶だな。出来なかった者は講義後は布を巻いて果物でも齧って寝てろ。これから、一人ずつ寝場所を作る。そこに札があるから、名前を呼ばれたらそれを持って来い。まず岸田」

岸田がエリアの元に向かうと、エリアはその手を取り、しばし迷ってから木を選びだした。岸田と手をつないだまま、もう一方の手で気に触れ、岸田に同じ事をさせる。

「サキユサキユサキユ……リウィラケウィラマーズ……」

エリアが唱えると、木がメキメキと音を立てて大きくなり、大きな洞を作った。

「とりあえず、ここで寝ろ。不満なら、自分でどうにかするんだな。」

次。イワン」

幸い、この術まで一人でやれとは言わなかった。

五百人分の家を作った時には日が落ちており、全員、食事をして眠りについた。

何故か、洞の中は暖かった。その事に、兵士達はほっとする。こうして、勇者部隊の生活は始まった。

4話

品のいい応接間。

首相の訪問を受け、アメリカ大統領は、戸惑っていた。

「こう、魔王がシュパパパって魔物の種をばら撒く装置は日本が用意しますから、アメリカはそれをババババって撃ち落とす兵器を作ってください。ああ、威力で手を抜いたら駄目ですよ。実弾使いますから。セットも本物使いますから」

日本国首相が重厚なテーブルの上に身を乗り出して、熱心に説明するのを、アメリカ大統領は困惑の眼差しで見ているしかない。

「……本気でやるのか？」

「本気ですとも。ここが一番熱い所、アメリカの見せ場なんですから頑張ってください。応援してます」

「日本でも、兵器を作っていると言う噂だが」

「当たり前じゃないですか。勇者には武器が無いと。魔王城のセットも二年で完成予定です」

「消息を絶った者たちは、元気なんだろうな」

懐疑的なアメリカ大統領の言葉に、首相はパツチリとウィンクした。

「きつちり六年後にお返ししますよ。腰を抜かすほどのサプライズを用意しているので、楽しみに待っていて下さい。あ、一年ごとに追加オーディションしますから」

「五百人も募っておいて、まだ集めるのか!？」

驚愕した大統領が、更に疑惑を深くする。

「歴史に残る祭りを起こして見せます」

「まさか日本が戦争を起こすなどと言うなよ？」

「最初から魔王を倒すと言っているじゃないですか。私、割と真剣に信じているんですよ、魔王降臨を。まあ、来なかったら来なかったで皆で騒いで楽しめばいいんです」

「……根拠はあるのか？」

熱に浮かれたような、楽しそうな首相に、狂っているのか、真実なのか判別を迷うアメリカ大統領。

そして、天秤は真実に傾く。アメリカ大統領の真剣な瞳。信じてくれたから、日本国首相は少しだけ真実を話す。

「ダークエルフのエリアは、地震の日時もピタリと当てています。そんな事、どんな地震学者も出来なかった。彼女の予知は本物です。資料も、その予知にそって作られています」

「……兵器は作ってやるが……。本当に魔王が襲ってきたら、リーダーはアメリカがやる」

「一週間で資料を頭に叩き込めたら、お願いしますよ」

クスクスと、絶対にできなかつたという想いを込めて、首相は笑った。

一方日本国では、来るべき祭りに備えて、幼稚園から企業に渡って、避難訓練が義務化されていた。

また、魔物に追い詰められてしまった時の「魔法のパンチ」の練習も無理やり日課に組み込む。

備蓄法を定めたのも、この頃だった。

その代り、土産物屋では勇者グッズを売り、特集番組をいくつも組ませて期待感を煽った。政府が主導して、勇者物のドラマまで作った。ちなみに、その映像にはエリアが持ってきた映像が使われている。

日本のドッキリ計画は、世界を巻き込んで、着実に進行していた。

そして、六年後。期待感が最高潮に高まったその年、突如空に真っ黒な歪みが現れた。

ブラックホールにしか見えないそれに、世界はパニックに陥った。誰が見ても、大空に開く黒い穴は不吉の象徴でしか無い。

この日の為、岩にかじりつく思いで政権を維持して来た日本国首相は、万感の思いでここぞとばかりに演説した。彼だけが、喜びに身を震わせていた。

「ついに予言された魔王がやってきた！ 各国の精鋭を集めた勇者チームは、戦闘態勢に入った！ 大丈夫、六年もの間、世界は一丸となって頑張ってきた。やれる！ 私達はやれる！ 具体的にはアメリカ様と恐ロシアの新兵器が魔王を灰にする！ とりあえず、対魔王包囲国家共通の法律である魔王法に従って、私が総指揮を取ります。各国に次ぐ！ 即時戦闘態勢に入り、警戒せよ！ 二カ月で魔王軍先発隊が襲いかかって来ると予測！ 対魔王包囲国家の代表は、一週間後の朝十時、首相官邸内部の魔王研究室にて緊急会議を行う！」

各国は、慌てて六年前に日本から送られてきた書類に目を通した。そして、対魔王包囲国家になつていない国は慌てて参加申請を出し、参加した国は国で、お遊びだからと言われて貰った対魔王包囲軍の役職に慌てていた。例えば、資金援助。例えば、食料援助。例えば、派兵。それらの約束を守れと言われても、大いに困るのである。なにせ、参加していた事すら、連絡が来るまでわからなかった国もある位だ。

テレビではやつきになつて魔物から逃げる際の注意点や魔物に効果があるとされる魔法パンチを繰り返し流し、国から指定された備蓄用品を表示する。

首相が、最低でも一か月は通常通りの生活が送れると言ったが、

同時に多分日本は真つ先に襲われるとも言ったので、誰もがリュックを手放さないようになった。

どこの国の防衛大臣も、長官も、将軍も呼びだされた。

どこの軍も、装備を再チェックし、食料の備蓄を確認した。

首相官邸へ日本内外から問い合わせの電話がひっきりなしに鳴る。

首相は、とても輝きながら会議の準備をしていた。

一週間後、朝八時になって首相は慌てて、自ら資料を抱えて魔王研究室に入った。

「遅い！」

アメリカ大統領が一喝する。そう、二時間前に全員集まったとの連絡が来たのだ。

首相は大使が来るのかなと思っていたが、どこの国も国家元首と防衛の長が二人、多い所は更に頭脳チームを引き連れて背後に立たせていた。

「これはすみません。では、新たに纏めた資料を配ります。一国につき一部取って回して下さい」

凄まじい勢いで配られていく資料。

剣野はスクリーンに次元の穴の資料を写した。

「敵軍の動きの予測について話させて頂きます。二カ月で先発隊到着、四ヶ月で本体着、五ヶ月ほどで後続隊着。これについては、歪曲した次元を見ても、一致した予知を見ても、ほぼ間違いないとさ

れています。更に、本体出現時に、魔物の大量発射を行うと見られています。更に、本体が次元の歪みを通行中に撃墜するのはかなりの危険を伴うので、見送るしかありません。そこで、我が軍は、主力にアメリカの魔王バスターを置き、魔王バスターで撃ち漏らした敵をその他の連合軍決死隊が撃墜。更に撃ち漏らした敵は各自で撃墜、着弾した所については現地の軍・警察が処理する予定となっています。魔王城本体については、勇者チームが探索した後、魔王ごとロシアの「太陽の輝き」で撃墜。これはどの作戦でも変わらない、大まかな動きです。なお、アメリカ、ロシアは主力兵器守護の為、連合軍決死隊は免除。ですが、先発隊にどの程度の兵器が効くのか、あるいは効かないのか、連合軍決死隊及び勇者チームで試射をして、その結果により、細かい戦術を選択します。最善は、魔王バスターと「太陽の輝き」で全て掃討してしまう事ですね。一応、全ての部隊について事前に定めてありますが、アメリカとロシアと勇者チームの動きさえ変わらなければ、どうともなります。勇者チームに関しては、魔物討伐から魔王暗殺まで多岐に渡って使用を検討しているのです、資料をご覧ください。それと、勇者チームから人を出して各国の軍と警察に魔法パンチの技術研修を行いますので、魔物が来ると思われる国は必ず申請を出して下さい。申請用紙回します」

申請用紙に国名を書きこまない国はいなかった。
アメリカ大統領が手をあげる。

「かつて、先代大統領が約束した、一週間で資料を覚えられればリーダーは譲る、という約束。守ってもらおうか」

「一応、引き継ぎ資料は用意してありますが。かなり膨大ですよ？それと、勇者チームは少々事情がありまして、独自性を保持します。作戦会議にはお呼びしますが」

「それで構わない」

「ロシアは決死隊、及び魔王城探索隊に参加する。「太陽の輝き」だが、魔王城とやらがどれほどの硬度なのかも調べる必要がある以上、参加しない事はいえぬ。何より、勇者チームの情報開示を求める」

「アメリカも、探索隊には参加する。勇者チームにもだ」

「探索隊に参加は無理じゃないですか？ 勇者チームについて行けると思えない」

「一チームに一人だけなら、まだ庇えると思います」

日本国首相の疑問と、剣野防衛大臣の指摘に、アメリカ大統領とロシア大統領は異口同音に言った。

「我が精鋭が日本に劣ると言うのか！」

「貴方達の所の精鋭ですがな。日本国籍にした覚えも無いし」

首相が突っ込み、剣野大臣がフォローした。

「いえ、彼ら、自在に飛ぶんですよ。ただ、習熟と才能が必要な上に、重量制限の関係があるんです。他にも、対魔物戦に特化した訓練を行っているので、通常と動きが違います。それで、ついて行くのは無理だと申し上げたんです」

「アメリカの兵士をアメリカが動かすのに問題はないな」

「そもそも、各国で兵を出しあつて魔王に備えようと言つ話だつたはずです。規定も資料の勇者チームの項に書いてあります。貴方も了承した事ですよ。それに、いざ魔王を退治すると言つ時に抜けられるのは困ります。特にアメリカの勇者の中には、重要な役割を負う予定の方も多いんです」

魔王が本当に現れるとは聞いていなかったもので、了承したと言われても非常に困るが、とにかく勇者チームの項を見る。

「ん？ この会議の後、一度全員帰つて来るのか。最低で二週間、大体一か月待機か。他に、要請出せば国にも配備されるんだな」

「ええ、命を掛けた任務につくわけですから。六年分の報告と通常部隊との訓練をしたいと言つてましたし、今まですつと休暇無しですからね。休暇中は兵士の自由となっていますが、もちろん自国の兵士を招聘するのは自由です。後、当然ですが魔王退治が終われば全員帰国します。それに先駆けて、勇者チームの細かい能力表と勇者管理ツールを母国の方に送付します。銃を持たせるような物ですから、国ごとに管理方法を法律で定める事をお勧めします。個人情報ですので、取り扱いには十分に注意してください。それと、日本及びリーダーの引き継ぎを求めるアメリカには、全勇者の情報が行く事をご了承ください」

「まあ、当たり前だな。勇者チームの総指揮官は……日本を代表する予知者、エリアか。彼女は何者だ？」

「エリア・サーキュリイ。かつての七英雄が一人。元ダークエルフで弓姫と呼ばれています。魔王の追跡者であり、日本へのアドバイザーであり、勇者チームの教官であり、あらゆる手段が通用しなかった場合、命を矢に変えて魔王を撃ち、退治する役割を持った女性

です」

「総指揮官が突撃してどうするんだ。変更を要求する」

「一応、副指揮官がもしもの時の司令塔になる予定です」

「決死隊だが、再編成を要請する。出動部隊を変えたい」

「勇者チームだが、具体的に何をやっているのか見たい」

「ああ、資料映像があるので、どうぞご覧ください」

剣野防衛大臣がスクリーンに映し出した映像を見て、彼らは絶句した。

そもそも、彼らは箒で空を飛んでいたのである。

片方の周囲に多数の光球が出現し、片方の光の壁を突き破らんと激突する。

「資料映像の内、片方……攻撃している方はランクSの今野です。うちのエースですよ。日本は小技を使う者が多く、彼は多対一に特化した魔法を習得する事が出来ました。人間に当てても少しふっ飛ばされる程度の威力ですが、小型の魔物相手なら充分致死性を持つとお墨付きをもらっています。威力なら同じくランクSのアレックスが一番ですがね。彼の魔法は時間が掛かる。それと、勇者チームですが、独自のランク制度を採用しています。Sが最大で、Eが最低です」

「馬鹿な……。魔法に魔王、まるでファンタジーではないか」

「ファンタジーな世界から来たから当然ですね。では、連合軍決死

隊の編成を行いますか」

そして、本格的に会議が始まった。

夜、慌ただしく帰国する要人達に、名簿がそれぞれ渡される。勇者チームの教導隊の名簿と、飛行機の到着時間である。

「ランクEじゃないか！」

「魔法パンチを教えるだけなんですから、当たり前じゃないですか。彼らはむしろ魔法パンチを教える為に一年鍛えた精鋭なので、心配はしないでください。さすがに、映像のあれは六年は訓練しないと無理ですよ。それと、ピストルと魔法パンチのどちらの方が効くのかは未知数です。魔法の出る幕が無い可能性も充分にありますよ」

最もである。

会議が終わると、各国はすぐに動いた。

連合軍決死隊を配備して時空の歪みを観察させ、軍を集めて魔法

パンチの講習をさせた。

「じゃあ、雷撃行きますんで、熱くなった体の熱をへそに集めて、腕から拳へ。そこで呪文を唱えて、パーンチ！ 雷撃を受けられるのは一日十回が限度です。三回以内でコントロールできれば才能あります。三日駄目なら魔力が無いです。魔法パンチは頑張れば平均して三日で極められます。基本は以上です。ランクE以上の方にはバッチを差しあげます。ランクC以上の方は、登録書類を出して下さい。それと、適性のある上位講習の申込用紙をお出ししますので、国の定める機関から許可証を発行してもらえば受けられます。ランクSは無いと思いますが、いたらこちらから国に協力要請を出します」

説明や手続きの方が時間が掛かると言う単純な訓練内容だった。

ごく短時間で多数の教習が終わる上、講習費用も無い。

その為、各国とも軍人や警察だけでなく、一般人からも人を集めて教習をする事になる。

魔法パンチに関しては、少なくとも説明の上では人間にはさほど害は無く、犯罪利用も可能な上位講習は内容と人を見て許可を出せばいい。ランクSに関しても、協力要請は拒否できる。そもそも、ランクC以上が少ない。

そういうわけで、デメリットがないのだ。

しかし、日本はその上を行っていた。

警察や軍隊だけでなく、全ての公立学校、主要企業、公的機関の職員を近くの広場等に呼びだし、それと希望者に魔法パンチの教習を行ったのである。

途方も無い人数だったが、一人一回の電撃、説明込みで一グループ五分で済むので恙無く進んだ。

一回百人程で、その中でランクC以上が出るのは多くて二人。いない事も多い上、住んでいる場所の近くが戦場になったら、少し手

伝ってもらっただけ、護衛はつけるとの事だったし、魔法にも興味があった人々は、さほど抵抗感なく集まった。

何かしないと不安でいられない、と言うのもあっただろう。

まず逃げる。捕まったら魔法パンチで殴って逃げる。間違っても立ち向かわないように。

そもそもアメリカとロシアが全滅させてくれるはずなので、心配はいりません。

そう繰り返す自衛隊員の説明を、真剣に聞いていた。

5話

ネットではその話題に終始していた。

その中の一つ、ランク保持者集まれ、というスレッドの会話である。

「Dランク取ったよー！ 何の義務も無い中で一番高いから、地味に嬉しい」

「Bランクだった。俺すげえ。会社帰りに市役所で講習を受ける事になった。何か、魔物が住んでる場所の近くに現れたら、警察の護衛付きで遠くから撃つ仕事を貰った。この怖いような嬉しいような複雑な気持ち。とりあえず魔物くんな」

「俺もBランク。結界特化。俺の家の隣、ちよつと大きな幼稚園があるんだけど、そこを守れって言われた。俺の為にだけに小学校一年生だけ幼稚園に疎開してくる事になった。ま、内地だから心配しないけどな。同じく魔物くんな」

「結構高ランクいるもんだな」

「おまいら、聞いてくれ。電撃貰う前に、魔力パンチの予行演習するだろ。そんときに、何故か近くの隊員さんが声掛けていたんだよ。もっと腰入るといいですよ的な。で、何気に殴る向きを人込みとは違う方向に誘導されたんだ。この時点でなんかおかしいと思ってた。で、電撃が終わって、もう一回パンチしたら、隊員さんに囲ま

れてたんだよ」

「何やった。もしかして、ランク高かったのか？」

「まあ聞いてくれ。で、当然登録書類を書かされて、簡単なテストをやらされた。魔力を右手に溜めながら、ボールを避けてみるとか。そうすると、「訓練しないでこれなら、ぎりぎり可かな」とか、武術訓練の経験はありますかとか聞かれるんだよ。で、カタログとお手伝い内容って表に書かれた紙袋渡されてさ、好きな一つどうぞって言うんだ。で、二時間後に講習があるのでご参加くださいって事で、今家の外で待ってて貰ってるわけだが。カタログ開いたら人間兵器用発信器って書いてあった上に、船の上で真上にビームする簡単なお仕事って書類と、ロシア失敗時の魔王暗殺の手引きって書いてあつてな……。お前らタスケテ」

「さすがにネタだろ」

「ありえないから」

「じゃあ銃持つてニコニコ顔で扉の外で待ってる自衛官はなんなんだよ！　ぎりぎり可じゃねーよ！　運動なんて高校以来やった事ねーんだよ！　左翼仕事しろ！　人権侵害だ！」

「もしかして都内？　確かに自衛官に連行された奴いたよ。AランクからCランクが地元待機で警察のお手伝い、Sランクが自衛隊つか勇者チームの管轄だったはず。つか真上にビームって、時空の歪み真下の決死隊の事だろ？　すげえな」

「勇者チームに友達いるんだけど、連合軍の防衛網が抜かれたら、日本全土に魔物が降り注ぐかもしれないんだって。内地とか関係な

いよ、空から来るんだから。あくまでも最悪の予想だけだな。防衛網がしけないから、魔法パンチを国民全員に覚えさせたわけだ。銃さえ効く事が確認されたら、試し打ちすらなしですぐ返してもらえないはずだし、日本も無傷で済むはず。ただし駄目だったら、ありえないほど不利になるので、戦いたくないとか言ってる場合じゃない。悪いけど、世界の為に頑張ってほしい。魔王に負けたらどっちみち殺されるんだし」

「魔法パンチは効くの？」

「効く。ランクEのバツ貰ってるなら、小型の魔物は倒せる。魔王が前襲撃した世界が、ファンタジーみたいな国で、日本はそこから警告もらって準備していたわけだが。そこ、魔法抜き武器ってほとんどないのな。だから、魔力を通さない矢は刺さらなかったって情報しか無い。あ、ちなみに魔力も通せない矢は向こうじゃ粗悪品で、威力は座布団一枚貫けない程度な。物理が効かなかった場合でも、一応勝算はある。あるけど、それには、民間人も訓練通りの動きをするって前提条件がある。つまりお前らの協力で勝てるかどうか決まって来るのな。座布団より硬いって程度なら、アメリカとロシアがミサイル撃って終わり……とまではいかないかもしれないが、被害なしで勝てる計画を練ってある。そういうわけで、ネットやってないで遠征の準備汁」

「うーん、さすがに物理攻撃全く聞かないって事はないんじゃない？」

「だよな」

「何事も無く終わる可能性は九割だけど、一割地獄になる可能性があるから、その一割に備えて準備しとけてわけか」

「そう言う事。俺もランクだから、講習だけ真面目に受けて、先発隊と連合軍決死隊との戦いを見てからどうするか決めるつもり。多分大丈夫だと思うけど、決死隊が一匹でも逃がしたら備蓄開始、歯が立たなかったらゲリラ戦の準備せんと。なんとしても嫁さんだけは守りたい」

「負けたら隠すんじゃないの？」

「いろんな国が監視映像放映してるから、どこかが映すだろ」

「予測では先発隊の侵攻は後一か月か……。これって戦争で、俺ら徴兵されるんだよな。緊張して来た」

「アメリカ様なら、アメリカ様ならやってくれると信じている！」

日本がパニックにならないのは、アメリカが負けるはずがないと言う信頼を抱いているからである。それは、日本だけではない。

世界各国から期待をされて、アメリカの兵器会社の魔王バスター責任者はパニックに陥っていた。どうせネタ兵器だからと、若手に任せられていたのである。

「ネタ兵器って言ってたのに！ 映画用って言っていたのに！ シュパパパってなんなんだ、どれくらいの大きさでどれくらいの速さでどれくらいの硬さだと言っんだ」

「落ち着け、何も魔王バスターしか使ってはいけないとは言われていない。とにかく、あの穴から飛来する物は何でも撃ち落とせばそれでいいんだ。仕様は変わっていない。兵器の展覧会と言うのも変わっていない。後は調整だけなんだろう？ 自慢の逸品なのだろう？ アメリカの威光を見せつけてこい」

そう言われても、若手は戸惑うばかりである。全く未知の敵に、不安に顔色を曇らせた。

様々な思惑を載せて、一ヶ月後、次元の歪みから、大人の片手分の直系の黒球が次々と出て来て、周囲へと広がった。

「敵影発見！ 敵影発見！」

「魔王バスター、発射！ 全軍、指定エリアの敵を攻撃！」

「駄目です！ 敵影、温度ありません！」

「なに！？」

実質的に、魔王バスターは使用不可である。

しかし、指揮官は冷静に攻撃指令を各軍に出した。各国の軍が、黒球を撃つ。何度か被弾した黒球は、魔物へと変じて軍に襲いかかる。

「ちつ硬い！」

鉛玉の雨を浴びせかけるが、魔物はしぶとく、中々倒れない。最悪ではないが、厳しい状況だ。

即席の魔法使いも連れて来はいるが、攻撃が当たらない。それどころか、民間から徴兵された彼らの中にはパニックに陥って泣き喚く者がいる始末で、酷いものであった。

軍人の魔法部隊も攻撃を行うが、今一当たらない。力の上でも、当てる上でも、敵が少し遠すぎる。彼らも、魔法を習って一月強程度なのだ。一応、当たれば一撃で倒せるのだが。

その点、勇者チーム、特にアメリカ兵は凄かった。その中でも一番は、何と言ってもアレックスである。

狙い定めて、着実に一匹一匹撃ち殺して行く。

その他の者も、着実に魔物を屠っていく。
魔物が死ぬと、消滅して鉱石に変わった。日本が言っていた、戦利品である。

司令官はすっかり忘れていたその事を思い出し、即座に頭の隅にメモして追いやる。日本を問いただすのは、後で良い。今問題なのは、この物理攻撃が極端に効きにくい化け物共を、いかに屠るかである。

「銃撃部隊！ 優先順位を黒球を魔物に変える事としろ！ 魔物は無視！ 一つも逃がさぬつもりでやれ！」

つもりというのは、既にいくつかのがれているからだ。小さく早く、数が多いそれを全て捕捉するのは至難の業だ。だが、ここに来る前、決死隊は確かに一つも逃さぬ事を約束して来ていた。許されざる敗北である。さらに、黒球を撃ち落とせば撃ち落とす程多く

なる魔物。自ら作った包囲網に、囚われていく。

「ランクなしは魔物を引きつけ、動きを阻害する事に集中！ ランク持ちは銃を捨てて、魔法攻撃！ 勇者！ 撤退の許可を出す！ が、仮にも勇者を名乗るなら、民間兵は連れて行け！」

あまりにも迅速な判断。しかし、的確であり、事前に決められていた事でもあった。魔法攻撃しか通じないなら、数少ない精鋭を失うわけにはいかないのだ。

「指揮官殿。切り札あります。撤退するのはギリギリまで粘ってからです。民間兵には、魔物の鉱石を集めて俺達の所に持ってこさせる許可を下さい」

勇者チームの日本人、今野が告げた。

「許す！」

勇気ある民間兵が、震える手で鉱石を拾い、渡した。

鉱石を握ると、その手の内から光が溢れた。呪文を唱えると、先ほどと同じ呪文に関わらず、十倍の数の光球が飛んでいく。

「おいおい、今野。ノーコンだぞ。大丈夫か？」

アレックスが揶揄する。

「さすがにこの数の制御は難しいですが……行けます。それより、貴方の出番の样ですよ」

今野は、余裕の笑みを見せる。その笑みには虎のような獰猛さが

秘められている。

アレックスは、大型の魔物の出現に目を眇めた。

「民間兵の皆さん、大丈夫です。必ず守ります。ですので、少しでも良いので手伝って下さい。集中できない人は鉱石拾いで援護を。落ち着いて来た人は、訓練通りの行動をして下さい。最初は出来なくて構いません。慣れる事を優先して下さい」

勇者チームの呼びかけに、なんとか頷く民間兵。

「指揮官殿、先発隊、終わりが見えました。約一時間で、先発隊出揃います」

指揮官は素早く弾薬のペースを計算する。少し厳しい。魔王バスターが使えなかったのが痛かった。射程の問題で、黒球を魔物にする作業には魔法は使えない。

「良しわかった！ では……」

指揮官の力が、今試される。

6話

激しい戦いの様子は、もちろん各国で報道されていた。
軍事評論家が、難しい顔で告げる。

「決死隊が生き残るのは、ちょっと厳しいかもしれませんが……。魔物の数が多すぎる。少なくない犠牲が出るでしょう」

「魔王バスターの失敗が原因ですか？」

「いえ、成功していたらもっと多くの敵に一気に囲まれていたはず
です。物理攻撃が殆ど効いていないのが、痛い。先発隊だけでこれ
ほどの数と言うのも、予想外です。更に、日本に飛来して来ている
黒球、自衛隊による撃墜は可能でしょうが、撃墜されても恐らく魔
物の姿になるだけです。市街地に落下すれば大変な事になります」

「たった今、速報が入ったようですね。撃墜された魔物が、画面上
に表示された町に落下中です。該当する町は状況F-5、それ以外
は状況D-3です。繰り返します。該当の町の状況F-5、それ以
外はD-3です。ただちに与えられた役割を果たして下さい」

事実上の、戦争開始である。

しかも、DやFというのはかなり状況が悪い時を表している。

ほぼ、物理攻撃に対して無敵と判断された格好だ。

この場合、警察や自衛隊のほとんどが避難を手伝う事しか出来な
くなる。

ランク持ちの割合は、平均して3%。その上、警察や自衛隊のめ
ばしいランク持ちは勇者チームに引き抜かれた為、警察・自衛隊の
ランク持ちの割合は1%にまで落ちていたからである。

ランク持ちが現場に急行するまで、長い所では三時間を必要とする。

気の遠くなる様な時間である。

国民達は、慌ててマニュアルを見て顔を蒼褪めさせた。

該当の町の者はなおさらである。

一応、民間のランク持ちならば、三十分もあれば呼びだせる。

これは、平均3%と言うほかに、単純に警官・自衛官よりも、それ以外の人の方が多いからだ。一番人口が低い町でも、千人強。ランク持ちが九人はいる計算だ。

ランクC以上は、非常時の任務についてしまった為、必然的に民間人が頼るのは、任務を持たない低ランク者であった。

しかし、もちろん彼らは民間人。戦いなど、何も知らない民間人なのだ。

特に低ランク者は、魔法パンチ以外の訓練は受けていない。

しかし、救いを求める者にそんな事は関係が無いのだ。

「お、お兄ちゃんランクDだね、お願い、助けて、助けてよ。お姉ちゃんが、お姉ちゃんが……！」

男は、引つ張り出されて途方に暮れていた。

周囲に自慢していたのが運のつき。

男は、暴れる女の子と乱暴しようとする魔物、血だらけで倒れるお巡りさんつきというお目に掛かりたくない現場に立ちあわされていた。

しかも、その女の子は知り合いなのだ。

「う……うわああああ！ 魔法パンチ！」

勇気を出して繰り出した一撃は、あっけなく魔物をふっ飛ばした。

「よよよよ……よし。出来た」

「君！ ランク持ちか、有難い！ この町に十匹もの魔物が落下したと連絡が入った。それらは卑劣な事に、幼稚園集団の結界を狙っているそうだ。手伝ってくれ！」

同僚を回収して、睨みあっていたお巡りさんが手招きする。

「マジデスカ……。結界つてまさか」

急行した先には、パニックになりつつも幼稚園の屋根にへばりついて手を掲げ、結界を維持している男がいた。

「超無理！ 無理無理無理！」

結界の周りには強そうな魔物がたむろしている。

「近いな、おい！」

「じゃあ、頼む！ 民間人にこんな事をさせるのは心苦しいが……」

「無理だよ、俺運動無理なんだって！ あんな大勢、囲まれてすぐ終わりだ！」

その時、魔物がこちらを向いた。

「うわぁっ」

襲いかかって来る魔物が、遠距離からの光球に鉋石に戻される。

「応援がついたそうだ！ 援護するから警察の防御を頼むだそうだ」

「マジかよ……」

その横で、女の人の手をしっかりと握ってせつせと買い物をしている通りすがりの男が、警察に女の人を預け、参戦してくれた。

「妻は俺がまもーる！ とりあえず、魔物は鉱石に帰れ！ これから俺はゲリラ戦の用意で忙しいんだ」

「あんたも掲示板に書き込んでた奴か？ 多いなこの地域のランク持ち！」

そう言いながらも、応戦する。

日本の各所で、そんな風景を見る事が出来た。

なんとか、第一陣は退治したが、これからが大変である。

指揮を取る事になったアメリカに、各国代表が集まる。

「忌々しき事態だ……」

「何と言っ事だ」

「さあさあ、落ち込んでいる暇はありませんよ。初戦は相討ちといった所。本番はこれからなのですから！」

キラキラしながら日本国首相が言う。その目は雄弁にはっひゃー！ 祭りだ祭りだ！ と叫んでいたのだじろりと睨まれた。

「ランク持ちを前線に、それ以外を予備に持ってくるしか無いな。」

その配分が問題だ。各国、ランク持ちの数を大体で良いから出してくれないか。もちろん、全員徴用などという真似はしない。少なくとも町に一人、長射程距離のCランクは必要だ」

その言葉に各国代表は頷いた。

「勇者チームからも、何人か人を配そうと思う。時間が無いが、それでも魔法パンチだけでは明らかに力不足。肉弾戦が出来る必要があるからな。適性がある者全員にレーザーか魔弾の術を覚えさせる必要がある。もちろん、勇者チームの戦力に関しては心配いらない向き不向きを考慮して、魔王退治の二軍、三軍に当たる者を各国に配す。幸いにも、人数も多い」

「それと、日本。お前が独り占めしようとしていた魔物の鉱石に関して、説明してもらおう。指揮官から連絡が来ている。あれは魔力増幅装置なのか？」

「そんな心外な。魔王討伐への貢献の正当な報酬を得ようとしただけですよ。……ええ、魔物を倒した後の鉱石は重要な資源となります。魔王が来た事で、唯一利点となりうる事です。これを使えば強力な術が使えるようになります。鉱石にも種類のような物があるようですな。ただ、魔王に対しては鉱石によるブースト技は効かず、生命力を丸々犠牲にして倒すしかなかったという話を聞いています。……そして、勇者チームのアレックスが倒せなかった場合、エリアさんがその命を消費して魔王を倒す予定です」

「対価は命だというのは……」

「才能ある者の命です」

アメリカ大統領は目を瞑った。

「魔王退治は世界の問題であり、鉾石という資源もまた世界の物だ。しかし、日本に優先権を与える事に同意する」

「ありがとうございます」

「その代り、今度こそ全ての情報を寄こせ。出し惜しみは無しだ。相手は、魔法文明がようやく倒した相手なのだから」

「君、例のファイルを持ってきたまえ」

こうして、会議は行われる。

次の先発隊の予想到着時刻が、迫っていた。

？

6 話（後書き）

これでネタのストックも空っぽだったり（・w・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9147w/>

魔王のこうせき（改訂版）

2011年10月2日22時24分発行